あの日観た紅い空

凡 飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの日観た紅い空

【Ｎコード】
Ｎ２９３０Ｙ

【作者名】
凡　飛鳥

【あらすじ】
少年、黒月　紫雨はこの世界に絶望し、ビルの上から落ちていった、そのまま重力に身を任せ、突っ込んだ先は異世界！？勇者として召喚された紫雨は、異世界で仲間達と共に生きる意味を知る。そして彼は元の世界に戻れるのだろうか、そして、彼は何を求めたのだろうか、ハチャメチャ異世界ファンタジー！

凡飛鳥、渾身の作品です。たくさんの感想をお待ちしております。

少しずつ主人公が強くなっていきます。最初から主人公チート物語が見たい方は、凡飛鳥の闇の端を歩く者をお勧めします。

飛び込んだ先は異世界でした、・・・・どうしてこうなった

もう、この世界に生きる意味も、悔いも、存在する理由ももうない、親は悲しむだろうが、この世界に生きるくらいなら剣と魔法の異世界に行った方が、まだマシだ。
この一言がフラグになるなんて、俺には思いもしなかった。
そして。重力に身を任せた、普通なら、そのまま死んでいる、はずだった、そう、
はずだったそのまま、地面と接吻をするなんて、思いもしなかった。
煎餅の欠片程さえも。
眼は、閉じていた、そして数秒後。
ゴンッ
「いってええええええええええええっ！！」
ざわっ、一瞬空気がざわめくしかし俺には理解できない。
「いった、痛すぎる、鼻が、顔がああっ」
思えば鼻の中に温かいものが、そう、みんなも理解していると思う、そう、鼻血だ。
「ヒール」
鼻の中にあった温かいものがきれいさっぱり無くなった、確かにヒール（治療）と言ってはいなかっただろうか。
「これは？」
「これは。治療の呪文です、ようこそ、異世界の客人様、そして…この世界の勇者様」
はい、みんなも一緒に叫びましょう。
「えええええええええええええええええええええええええええええええええええええ！？」
どういう事でしょう。俺は、勇者となったようです。
「どういう事か詳しく教えていただけますかね？」
「もちろんです、こちらへどうぞ」

俺を召喚したらしき方は、女の方でした、しかもアニメに出てきそうなかなりの美形の方でした。
向こうの世界で生きるくらいなら、この世界で勇者になってやってもいいかな、そう思っていた時期が、私にもありました。
扉が開けられ、入った部屋が。何とも綺麗な、まさしく王宮というべきお部屋でした。
「それで、どういうことですかね？」
「では単刀直入にいます」
「どうぞ」
「魔王からこの世界をお救い下さい」
「うん、いいよ」
一瞬の沈黙、そして
「すいません、うまく聞き取れなかったのでもう一度よろしいですか？」
「魔王倒してもいいよ」
「・・・え？」
「魔王倒してもいいよ？」
「えええ！？」
「無理なの？だめなの？」
「いえ、そう仰ってくれるのは、とても嬉しい事なんですが、もう少し言葉を濁したりすると思って・・・」
「ああ、そうでしたかしかし、すぐに魔王討伐は無理なのはそちらもわかっていると思います、そのため、力を付けるために、９ヶ月、九ヶ月の時間を与えてください」
「ええ？それだけでいいんですか？」
「ええ、まあ」
「わ、わかりました九ヶ月の特訓の時間を与えます」
「ありがとうございます」
こうして、勇者が魔王を倒すと誓ったのだった。
この話し合いは、のちの紅き英雄物語に書かれる事となる。

まさかの暗殺者、そして奇跡の再開

九ヶ月の期間を貰った、チームは、魔術師、ヒーラーのアルシナさん、俺を召喚した姫さんでした。
そして騎士のエルスさん、姫さんの護衛、俺はなんか姫さんに害を与えると思っているらしい。
与えないのに、なぜか怪しまれてる、やはりどの世界でも理不尽なことは存在するようだ。
アルシナさんが、明日魔法練習しませんか？と聞いてきた、強くなりたい俺はこの練習をすることにした。
そして、その日の夜、夢の中で、簡易的な魔法を、神と名乗る者に教えて貰った。
そして次の日。
「うーんよく寝たなあ、ん、まだ四時か、マラソンでもしてくるか―」
どうやら、神（と名乗るもの）に教えてもらったところ、時間の感覚は全くというほど同じで、時計はアナログらしい、見てみたところアナログだった。
部屋から出る、やはり城の中というのはどうも疲れる、確かこれは、知り合いの言葉だった気がする。
夜影（ヨカゲ）　狼火（ロウカ）、彼は話しているとき、彼がどこかの国に旅行した時に言っていた言葉だった、たまたまツアーで城の中に入れたらしい、しかしその話の時彼は、『城の中はどうも疲れる』と言っていた、彼は自然と会話していた、みんなは笑ったり、罵ったり、気味悪がったりしていたが、俺は、その優しい心に感動した、そして、俺は彼と親しい仲となった、しかし三年前、突然の行方不明、空港の履歴を漁っても出なかったらしい、彼は、今どこにいるのだろうか。
その時風が吹いた、久しい友の声を聴いた気がする、『他人より自分のことを考えたらどうだ、紫雨』

後ろを振り向いた、誰もいない、…空耳、か。
俺は、友達が彼しかいなかった、彼は、動物と完全に調和していて、彼のおかげで、簡単なことなら自然の意思がわかるようになった、そんな日は、三年前、消えた、突然の行方不明、狼火だけ消えた、俺は、その次の日からいじめにあった、そして、昨日、飛び降りた、結果、行ったところは、あの世じゃなく異世界だったけど。まあ、これで絶対彼には会えないな、思った瞬間、後ろからの殺気、アルシナさんに渡されたショートソードで受け流す、黄色い髪の人間、武器は鎖鎌、勝てない、わかる、この鎖鎌は、刃が二個ついている片方が防げても、もう片方で殺せる、ここで終わり？昨日来たばっかりだぞ、寿命が一日延びただけじゃないか、逃げる？無理だ、相手は暗殺者、音もなしに速い速度で近づくなんて基本中の基本だろう。
なぜ？どこの命令だ、考える、魔王は魔族しか手下に置かないし、まさか、他の国！？この国の勇者を暗殺して、自分の国で新たに召喚、鍛え、魔王を倒す、そして名声を得る？ありえない、勇者召喚は世界の命運を握っている、しかも本当に危険な時、一度しか召喚できない、考えてる間に敵は近づいてくる、クソッその時
バサッ
黒い服を着て、顔を隠すくらいのフードをかぶり、黒い布を首元に巻いているものが舞い降りた、そのものは暗殺用に使うような黒光りする短剣を持っていた、口元は笑っている、微笑みのようにも見えた、顔全体は、黒いフードのせいで見えなかった、何者だ、その瞬間。
「だ、誰だ貴様！！俺が誰だか知っているのか！？」
「ああ、知っているさ、百殺のグレイナだろう？」
「な、ほとんどこの名前は暗殺者の中でしか回ってないのになぜ知っている！！」
「お喋りが過ぎるな、あまり話すのは好きではない、一定の者を除いてな」

「お前、その性格、その口調、まさか」
「そうさ、死にゆくお前に教えてやろう、死風の二つ名を持つ、暗殺者、ヨカゲ　ロウカだ」
「く、恐れはしない！俺は死なない！」
「じゃあ、その考えが歪まないように、一瞬で終わらそうか」
そして、瞬きよりも早く、一瞬で、グレイナは絶命した。
「殺す前に殺気を放出するなんて、三流だな」
「ふぅ、元気だったか？紫雨」
「な、お、おまえ」
男はフードを取り、首元に巻いた黒い布も取った、確かにその顔は、紛れのない、狼火だった。
「ろ、狼火？」
「ああ、正真正銘物の狼火だ」
「そんな、どうしてこの世界にいるんだ」
「よくわからないが、近くの公園に一際大きな木があっただろう、あの木の調子を聴こうとしたら、木の中に入って行ったんだよ、気が付いたら大平原の真ん中にいた」
「三年前、いなくなったのはそのせいなのか？」
「ああ、そうだ」
遠くから騒ぎ声が、結界が二人の登録されていない人間が侵入したため、兵士たちに散策の命令が出されたのだ。
「チッ、すまない、じゃあな」
「おい、待てよ！」
狼火は短剣とフードの付いた黒いマント、黒い布をとってから飛び降りた。
…ここ、四階だぞ？
「シグレ様、大丈夫ですか！？」
「大丈夫だよ」
「さっきの者は、暗殺者でしょうか」
「いや、暗殺しようとしてきたのはこいつだよ」

親指でもう胴体と首がおさらばしたものを指す、兵士たちは一瞬驚いたがすぐに視点をこちらに向け。
「勇者様が撃退したのですね！しかしさっきの黒服の奴はなんだったのでしょう」
「いや、これは俺じゃなくて、その黒服の奴がやったんだ、そいつは、暗殺者だけど、前の世界の、最初で唯一の」
「――――親友なんだ」

合成魔法

この世界には、四つの国があった、獣国ウルフェル、魔国シウヴェナ、美国ナルシス、そして――神聖皇国シルヴァニアス。

魔国は、何の活動もない荒れた土地と言われていた、しかし入ったものは必ず帰っては来れなかった。

そして、ブレイズ４０００年…魔国から大量の魔物が現れた。

ウルフェル、そしてナルシスが占領され、運よく生き残った者がこの国、そうシルヴァニアスに集まった。

しかし、シルヴァニアスはすべての生き残った人を温かく迎えた。

だが、ナルシスの国民は他の国民を自分より下の物とみる国民が多かった、シルヴァニアスで無理やり結婚させたり、暴動を起こしたりした。

更に、獣国の住民を奴隷としてまで扱った。

シルヴァニアスは、ナルシスの王に話をし、そのような扱いや暴動はもうない、しかしナルシスの国民は生活の中で差別を行うものが少数だがまだいる、さらには、救ったシルヴァニアスの住民さえも見下す者も僅かだがいるのだ。

しかしある白魔道師が作った合成魔法、『心身浄化』が国全土に降り注ぎ、そのようなことはなくなった、合成魔法とは、ある魔法とほかの魔法を合成し、一つの魔法として改造することである、大抵の場合は失敗するようだが、俺には才能があるようで、適当に作ってくださいと言われたため創ってその魔法を使ってみたら…

「どうやったらこうなるんですか…」

「あ、ありえん」

「あ、あはははは…」

俺の放った合成魔法『光聖霊の大弓――疾走』が練習場を無に還したのだ。
「どうしましょう…」
「でも、これくらいの魔法放てる人なんて沢山いるんでしょ？」
「いますが、これを時魔法で戻すことはできませんね」

「え？なんで？」
「それは…この魔法に光の聖霊の力が宿っているからです」
なんてことだ、しかし俺の頭には新たな考えが出てきた。
「俺の魔法のせいで治せないなら、俺が時魔法で治せばいい！」
「それもそうですね！でもできるのでしょうか？」
「できる！けど…」
「けど？…」

「魔力足りないっ！」
フラッ
そしてそのまま紫雨は倒れた。

紫雨：初めての狩りのＶＴＲをみてください！　狼火：初めてのおつかいみたい

これは飛ばしてもいいと思います、ていうかキャラが今回だけ少し
変わってもいい勇気がある人のみ見た方がいいです。
作者が出てきます、言葉だけですが

今回は、はっきり言って……ネタです。

俺は今、精霊の森というところに来ている、ここは下級モンスターがいてだいぶ楽な狩りの場所らしい。
今は貸切で俺の訓練に来たらしい、アルシナさんによると「やはり騎士同士よりモンスターとの戦闘を知った方が良いのです！！」らしい。別にモンスターなんて光聖霊の大弓――――疾走で一撃だよ！
その後気絶したのは内緒です。
「みんなにはないしょだよっ！」
「？？？」
すると。
「大丈夫だ…紫雨殿、既に前回の話を見ている方は皆知っていられる」
「前回？なにそれ美味しいの？」
断じて倒れてなどいないッ！と言い張る、そして最後になっては前回は作者の問題だ！と言い張る、なんてやつだ。

「作者が悪いから俺もこんな弱いキャラになるんだーっ！」
それはないだろう。主人公最強はすでに闇の端を歩くもので間に合ってるんだから、君は少しずつ強くなるＲＰＧ的な楽しみをしらな

いのかい

「作者が悪いからこんな風になるんだ、作者が優しくないから、うわああん」

紫雨は地面に突っ伏して泣きながら作者に「この作者に抗議する！うわあああっ」と叫んでいる、まったく、産みの親になんてことを！

「俺の親は邦治郎って名前の父さんと有菜って名前の母さんしかいない！お前なんか親でも産みの親でもなんでもなーい！」と言っている。創ったの僕ですから！貴方の親の名前決めたの僕ですから！あなたの名前も！。

それにわかったのか紫雨は黙る。

「一つ…いいかな…」

好きにしなさい

「作者の馬鹿ーっ！！」

そして日は落ちる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2930y/

あの日観た紅い空

2011年11月29日19時52分発行